

# 北見の建具+仏具の職人をご紹介します

一般社団法人北見工業技術センター運営協会 技術開発課 主任技師 佐藤 敏子

URL <http://www.kitami-itc.or.jp/>



## ■はじめに

「また、北見工業技術センターの佐藤か？」という声が届きそうで恐縮です。顧みますと本誌に拙文を寄稿させていただくのは、5回目になります。2012年の7月号に「高齢者の心身と脳を鍛える木育福祉玩具の開発」のレポートを掲載していただいたのが始まりで、2014年には「低価格焼肉&除雪機ハウスの開発」と「公共建築物等木材利用促進法に建具の開発」、2016年に「北見木工協同組合：耐震木製書架の開発」といずれも開発の経緯などを報告するものでした。お世話になっている林産試験場の方から「福祉玩具はその後どうなったの？」と聞かれたり、「ウッドエイジによく原稿を寄せている北見の佐藤さんです。」と紹介していただいたり、その影響力を実感して思わず緊張してしまう場面もありました。

認知症を予防する玩具を目指してスタートした研究は、玩具福祉学会との連携により「玩具療法用の玩具の開発」にテーマを変えながら5年間続け、“オホーツク木製品デザインコンペ”で銀賞を受賞するなど、この取り組みの意義を評価していただくことができました。カラマツ間伐材を有効利用した「もりもりハウス」は3棟を販売し、表面に北見市内のトドマツ間伐材を貼った「とどフラッシュ」とネーミングした建具は、2017年8月に竣工した北見消防署留辺蘂支署と同年12月に改築された留辺蘂小学校に採用されています。



北見消防署留辺蘂支署に納品した“とどフラッシュ”

初めて福祉玩具開発のレポートを本誌に掲載していただいたのは、当センターに就職してから21年目になっていました。退職までに何がしかの足跡を示せたらと願っていた私にとっては、記憶に残る嬉しい出来事でした。

私は、東海大学工芸短期大学を卒業してから旭川の木材会社や家具工場でNCルータのオペレータとして働いておりましたが、33歳の時CAD/CAMに対応する技術者を全国公募していた当センターに採用されて北見に移住してまいりました。新たな職場の仕事を通じてたくさんの素晴らしい方々と出会い、ご指導をいただきながらこれまで勤めてまいりましたが、この方の励ましが心の支えになって続けてこられたと感謝している北見の恩人を、ご紹介したいと思います。

## ■素晴らしい上司たち

北見工業技術センターは1982年に開設され、第3セクター方式の法人が運営する試験研究機関としてスタートしました。木工・民芸・製材を担当する工芸課技師として私が配置されたのは開設から8年目の年度末でした。同課には伊藤廣技師がいて、機械・金属課には技師が2名、技能職員が各課1名の技術スタッフがいました。運営委員は関係業界団体の代表で組織され、町田嘉雄会長と大石次郎専務理事（センター長兼務）は常勤の役員でした。町田会長は元職業訓練校の校長で、北見校で部下だった大石さんと伊藤さんに、北見地方の業界の発展のために協力してほしいと声をかけたことから、道職員を退職して団体職員になったという、使命感に燃える人たちでした。建具や家具を製造する会社の社長や職人には教え子がたくさんいて、旭川の木工業界でも“大石先生”“伊藤先生”の知名度の高さに驚かされることも多かったのですが、それぞれのキャリアも想像を超えるものでした。

大石さんは、地元北見の建具職人から指導員になり、4年半の海外指導生活（フィリピン）を経験しています。当センターには所長として着任したのち、専務理事となりました。1994年オホーツク木のプラ

が開設されると、2015年30回開催を最後に惜しまれつつ幕を閉じた“オホーツク「木」のフェスティバル”を長年にわたりけん引してきた功績により、切望されて運営団体の専務理事になり、活動エリアをオホーツク圏域に広げ、木材産業の活性化に取り組みました。

伊藤さんは帯広出身です。千葉大学工芸短期大学部木材工芸科卒で、成田壽一郎氏に師事した学生時代に「木材工芸用語辞典」の編集を手伝ったそうです。成田教授を講演会に招いた折、「日本の木材加工技術の発展を担っている伊藤を頼む。」と私の手を取って懇願されたお姿が、今でも目に浮かびます。また、北海道教育大学教授として漆工芸を教え、北海道デザイン協議会会長を務められた伊藤隆一氏との親交も深く、フィンランドでの長期のデザイン研修を紹介していたこともあったそうです。

他の試験研究機関の研究員の物静かなイメージとは対極にあるような、政治家として立候補したら当選するに違いないカリスマ性や講演力を発揮されるのを間近で見ることが重なるにつれて、このような素晴らしい方たちの下で働けることを誇らしく思う反面、「どんなことでも、一生懸命やればなんとかなる。」という想いだけではどうにもならない人間力の差を思い知ることになりました。人前で話すのが特に苦手な私は、お二人のコミュニケーション能力を倣うことは早々に断念し、なるべく気配を消して補佐に徹することを心に決めたのでした。

### ■最高の建具職人との出会い

私が入社したのは、湾岸戦争が終結し、バブル経済の崩壊が始まろうとしていたころでしたが、外部講師を招いて技術講習会を年に3回程度開催していました。木材乾燥や塗装、デザインなどの講習会を開催すると、必ず一番前に着席して熱心に受講されるご夫婦がいました。「北見で木製建具を作らせたなら右に出る人がいない。」と、誰もが敬意を払う生出木工の生出一芳代表と弘子夫人です。気難しい職人氣質の風貌で、近寄りがたい印象でしたが、はじめて工場に伺った時に、「工業技術センターができて、我々木工業界は随分と助けられているんだよ。木材乾燥講習会で平衡含水率を教えてもらってから、修理をする必要がない建具をつくれるようになったのが大きいよね。」と、開口一番に話されたことは衝撃的でした。「平衡含水率」を日常会話のように使われていることと、その時まで試験研究機関に対して心からの感謝の言葉を

業界関係者から聞いたことが無かったからです。旭川で働いていた12年間、ミズナラやセン・カバなどの広葉樹の量産箱モノ家具の扉や引き出し・幕板・取っ手をNCルータを使って加工していた私には、エゾマツやスプルスなどの針葉樹で製造した製品を建物に取り付ける建具製造技術は、全く未知の分野でした。建具企業の経営者には、「女の人だし、どうせ長くは勤まるまい。」と思われていると分かる対応をされるが多かったのですが、生出代表は性別や年齢差による先入観を持たずに私の経歴に興味を示され、当センターの技師として認知して下さっている様子に、最高の建具職人は、優れた人格の持ち主でもあることに感銘を受けたのでした。

### ■生出木工の挑戦



生出代表 須弥壇(しゅみだん)を作る仏具

2002年、生出木工は新規参入分野である仏具製造に着手しました。「本尊を乗せる須弥壇を作ってもらえないか。」と、以前建具を納品したことがある北見の寺の住職からの依頼に応えたのが始まりでした。高气密高断熱化された建物で暖房した空間に置かれると、本州で作られた仏具は、数年で接合部分が破損するなどの問題が起きていたのです。住職に原因を尋ねられた折に、生出代表は講習会の資料を見せながら平衡含水率を説明し、人工乾燥して応力除去した木材を用いれば変形による問題が解決することと、セン材を用いて着色塗装をすると、ケヤキに漆を施した従来製品に類似したものを作ることが可能であると提案したそうです。

生出木工の仏具は口コミで広がり納品先は20軒を超え、80歳を過ぎた今もご夫婦で力を合わせて作り続けています。私は、このように素晴らしい職人に学び、支えていただきながら勤めてこられたことに、心より感謝申し上げたいと思っています。